2013年（平成25年）1月1日　火曜日　長野日報　（1面）

東北救う諏訪湖のヒシ

樹木苗木作りに堆肥利用

諏訪湖のヒシが東日本大震災被災地の緑の栄養に―。諏訪湖の水草ヒシを原料にした堆肥が、地域の再建を目指して東北の津波被災地に植えられる樹木の苗木作りに利用され始めた。諏訪湖に流れ込んだ栄養分が、将来、地域の風景として人々に憩いや元気をもたらす〝緑の素〟となり、苗木を大きく育てている。湖では厄介者のヒシだが、形を変えて被災地復興に一役買うことになりそうだ。（倉本敦）

下諏訪町社の諏訪湖浄化推進「和限」（中村義幸代表）が作るヒシの堆肥が、社会福祉法人進和学園（神奈川県平塚市）の障害者就労施設「しんわルネッサンス」の苗木作り活動に役立てられ、今後、被災地に植えられる。

「和限」は補助金を受けて堆肥作りを行っており、ヒシに発酵菌や粉ぬか、大豆かすなどを混入し植物性の素材で仕上げている。2012年は約30立方㍍を作った。諏訪地方でも障害者福祉施設の畑などで利用している。

中村代表(56)は11年から、同施設の苗木作りに協力しようと無償で堆肥を提供し、現地まで直接届けている。12年は自ら2㌧ダンプを2回ほど走らせた。

一方、障害者の就労機会を設けている同施設では、「いのちの森づくり」と名付けてドングリの実からポット苗を栽培する事業を展開。施設事業の柱の一つで、苗木の売り上げは工賃に充てている。

震災後、森づくりの活動の一環で、津波被災地で進められる森の防潮堤計画に加わることになった。東北で集めたドングリを発芽させるなど、現地での植樹に向けた苗木栽培に取り組み始めた。

提供を受けたヒシの堆肥の効果的な使い方も研究。その結果、ポットの土にヒシの堆肥を2～3割混ぜ込むことにした。同施設主幹の遠山雄志さん(40)は「これまではいい土を買って使い、堆肥は入れてなかった。ヒシの堆肥の効果に期待してます」と苗木の成長を見守る。

遠山さんによると、東北で進められているプロジェクトは、300㍍の距離に約9000万本の木を植えるという壮大な構想。全国のボランティアが、現地でドングリ集めなどに協力を始めているという。

同施設は、これまでに東北で集められたドングリなどの実2万個近くから苗木1300本ほどを育てた。まだ発芽率は低く、息の長い地道な活動になる。それでも遠山さんは被災地の復興を願い、「将来的には8万本規模の育苗ハウスで年間2～3万本の出荷を目指したい」と意気込む。

堆肥を提供する中村代表は「被災地の復興も次の段階に動き始めているが、記憶は段々と薄れていく。できる範囲ではあるが、小さなことでもかかわっていきたい。諏訪湖のヒシが被災地復興に役立てば、諏訪の人間としてもうれしいことです」と話した。

ポットに苗木を移植する施設関係者と円内はヒシの堆肥で育つ苗木（進和学園提供）